論 文 内 容 の 要 旨

氏　名	唐 昭君
論 文 題 目	手話の認知言語学的研究 ―日・中手話の比較を中心に―

要　旨

本論文は、認知言語学の枠組に基づき、日・中手話のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。本研究では、手話の認知言語学的研究において特に注目されている身体部位、感情表現、空間運用に関わる手話表現を中心に、日・中手話の伝達機能と認知のメカニズムの解明を試みている。本論文の主な研究対象は、健常者の日・中手話が主眼となっているが、本論文ではさらに、聴覚障害者の認知能力に基づく手話の運用の諸相と、この種の認知能力に基づく手話学習の可能性を論じている。

本論文は、以下の六章から構成される。

第一章では、本研究の背景として、日本と中国の手話の使用に関する現状を紹介し、本論文の研究目標を明らかにしている。日本と中国の手話では、方言手話が広範に使われているが、手話の標準化も進める必要がある。本研究はこの点を考慮し、日・中手話の言語学の分野における先行研究（特に、認知言語学における先行研究）を概観し、これまでのこの分野における問題点を批判的に検討している。

第二章では、手話の表現と伝達を可能とする基本的な認知能力の観点から、日・中手話の伝達機能と認知のメカニズムの解明を試みている。これまでの認知言語学の研究では、日常言語の表現と理解のメカニズムに、話者の一般的な認知能力が重要な役割をになう事実が明らかにされている。この分野の研究では、以上の一般的な認知能力の中でも、特に、メタファー、イメージ・スキーマ、メトニミー、参照点能力などに関わる認知能力の一面が明らかにされている。本研究は、日常言語の表現と理解を可能とするこの種の認知能力が、身振りや身体動作を中心とする手話言語にも反映される点に注目し、手話表現の意味の創造性の解明を試みている。手話表現には、（日常言語と同様）字義通りの意味と字義通りの意味から拡張された創造的な意味が存在する。本章では、これらの二種類の意味のうち、特に後者のタイプの意味の創発のメカニズムの説明を可能とする枠組みとして、メタファー変換、イメージ拡張、メトニミー変換の記述的な枠組みを提示している。本章で提示される以上の記述的な枠組みは、次章以降における日・中手話の具体的な表現（特に、身体部位に基づく表現と感情表現）の分析の道具立てとして提案されている。

第三章では、日・中手話における「頭」、「手」、「口」、等の身体部位の手話表現の意味拡張のメカニズムを考察し、両手話における以下の共通点と違いを明らかにしている。両手話の「頭」に関する意味拡張は、基本的に形状の類似性に基づいている。例えば、「頭」の先端部分という意味への拡張は一致している。しかし、時間的な意味への拡張は異なる。日本語の場合には、「頭」は始まりの時間を表すが、中国語の場合は始めと終わりの両方を含んでいる。日本手話と中国手話の「手」の表現は、メトニミー的に方向を意味し、両手の形で比喩的に容器を意味する点は共通している。しかし、日本

手話では、移動の痕跡を「起点―経路―終点」のメタファーで示すが、中国手話にはこの種の手話は存在しない。両手話の「口」の表現は、咀嚼に関わる器官、出入り口、物事の始めなどの意味は共通しているが、日本語手話の意味拡張による就職口、評判の意味は中国手話には認められない。本章では、以上のような日・中手話の身体部位の意味拡張の共通性と違いを具体的に明らかにしている。

第四章では、日・中手話における感情表現のメタファーとメトニミーによる意味拡張のメカニズムを考察している。特に本章では、日・中手話の感情表現のメタファーには、主に容器のメタファー、身体部位の機能によるメタファー、空間のメタファーの三種類のメタファーが存在する事実を明らかにしている。日本手話では、「満足」は、右手を下に向け、腹から胸に沿って上げる動作で表現する。これに対し、「怒り」の場合には、この感情を液体に見立て、液体が腹から押し上げられる動作で表現する。中国手話の場合には、「満足」、「怒り」の感情は気体に見立てられる。満足の感情は、胸がこの種の気で満たされるという表現として、また怒りは胸の中で気が渦巻くような仕草で表現される。基本的に日・中の手話の違いは、感情が液体で見立てられるか気体で見立てられるかにある。また、「嫌悪」の感情は、中国手話では鼻による嗅覚、日本手話では喉の不快の感覚を示す身体動作によってメトニミー的に表現される。また、感情を表現する手話では、上・下、遠・近などの空間と方位の関係で感情を表すことができる。例えば、日・中手話では、プラスの感情とマイナスの感情は、それぞれ上方向と下方向の空間運動によってメトニミー的に表現される。本章では、日・中手話の感情表現に関する以上の事実が明らかにされている。

第五章では、日・中手話における空間認知と方位関係に基づく時間のメトニミー表現の諸相を考察している。基本的に、前・後の方向がそれぞれ未来と過去を示す表現は両言語に認められる。しかし、中国語の手話では、さらに上・下、左・右に関わる表現も存在する。例えば、「過去は下、未来は上」の表現は、生物が上に向かって成長する方向性、「過去は上、未来は下」の表現は川の上流から下流への方向性、「過去は右、未来は左」の表現は、（北向きの場合）太陽が東から昇り西に沈む方向性によって経験的に動機づけられている事実を明らかにしている。日本語手話には、この種の方向性の次元に基づく手話は存在しない。従来の手話研究では、以上のような日・中の空間認知と方位関係に基づく手話の比較研究は等閑視されている。本章は、この方面の日・中手話の共通性と相違を体系的に明らかにしている。

第六章の結語と展望の章では、認知言語学と言語学の関連分野からみた本研究の意義と今後の研究の展望を論じている。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	唐 昭君
論 文 題 目	手話の認知言語学的研究 ―日・中手話の比較を中心に―

要　旨

本論文は、認知言語学の枠組に基づく日・中手話の記号構造と認知のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。これまでの伝統的な手話の研究は、主に形式と構造に関わる手話の記号構造の分析が中心になっているが、手話記号の形式と意味の関係を特徴づける認知能力のメカニズムの観点からの研究は本格的にはなされていない。本研究の独創的な点は、手話の記号構造の解明に際し、人間の記号能力の発現を可能とする認知能力の観点から、形式と意味の対応関係からなる手話の記号構造の分析を試みている点にある。本研究では、この種の認知能力のうち、特に類似性の認識に基づくメタファーの能力と隣接性（ないしは近接性）の認識に基づくメトニミーの能力に基づいて、日・中手話の認知分析を試みている。

従来の手話研究は、特に手話の形式的な側面の統語論的なアプローチの研究が主流をなしている。特にこのアプローチでは、手話の記号関係を特徴づける手、腕を中心とする身体部位の位置、方向、動きの形式的な記号関係の分析が中心になっている。手話の形式的な分析は、身体部位による身振りの記号には、字義通りの意味が自律的に対応している、という前提に基づいている。これに対し、本研究は、手話記号に関わる位置、方向、動きは、字義通りの意味だけでなく、インデックス性や類似性の認知に動機づけられる修辞的な意味を伝達する記号として機能する事実に注目し、この後者の修辞的な意味の諸相を、メタファー変換、メトニミー変換、イメージ拡張、等の認知作用に基づいて分析している点に独創性が認められる。

また、伝統的な手話の研究は、手話に関わる身体部位のうち、特に手と腕を中心とする身振りの記号とこれに対応する意味の分析が中心になっている。しかし、手話に関わる動作や身振りには、さらに頭、口などの動き、方向、等も重要な役割をになう。本研究は、後者のタイプの身体部位の手話記号としての意味（特に、この種の手話記号の拡張的な意味）の諸相の認知的分析を、日・中手話の比較を通して試みている点が注目される。本研究はこの比較分析により、日・中手話の以下の共通点と違いを明らかにしている点が特に注目される：(i) 両言語の「頭」に関する手話の意味拡張は、基本的に形状の類似性に基づいている。(ii)「頭」が先端の意味に拡張する点は一致しているが、時間的な意味への拡張は異なる。(iii) 日本語の場合には、「頭」は始まりの時間を表すが、中国語の場合は始めと終わりの両方も含んでいる。(iv) 日本手話と中国手話の「手」の表現は、メトニミー的に方向を意味し、両手の形で比喩的に容器を意味する点は共通している。(v) 日本手話では、移動の痕跡を <起点―経路―終点> のメタファーで示すが、中国手話にはこの種の手話は存在しない。日・中手話の頭、手、等の身体部位の意味拡張に関する以上の事実は、今後の手話研究における意味の創造性の分析に重要な

知見を提供する。

本研究はさらに、日・中手話の感情に関わる比喩表現の違いを、メタファーの認知作用に基づいて明らかにしている点が注目される。伝統的な手話研究では、喜怒哀楽に関わる手話表現は、基本的に個々の感情を示す身振りの語彙として、手話言語の辞書部門に列挙されるにとどまる。これに対し、本研究はさらに踏み込んで、感情を示す身振りの意味を比喩的な見立てに基づいて説明している。例えば、怒りの意味は、日本語の手話では腹の周りを上方向に移動する仕草で示される。また中国語の手話では、この感情は胸の周りを渦巻くような仕草で示される。本研究では、この種の身振りは、日本語では液体、中国語では気体が、容器に見立てられた腹（ないしは胸）からこみ上げる比喩的な表現として分析する点に独創性が認められる。

以上、本研究は認知言語学の枠組みに基づいて、日・中手話の記号構造と認知のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。これまでの認知言語学の研究は、日常言語の形式と意味に関する研究が中心となり、非・言語伝達に関わる記号現象の認知分析は本格的にはなされていない。本研究は、認知言語学の分析手法（特に、メタファー、メトニミー、イメージ拡張に関わる分析手法）を、非・言語伝達の手段である手話言語の研究に適用し、手話言語の意味拡張の諸相を明らかにしている点で、特筆すべき研究と言える。また、本研究は、言語文化的な背景の異なる日・中の手話言語の比較研究である。この種の比較研究は、手話言語の普遍性と個別性を明らかにするためのケース・スタディとしても重要な意味をもつと言える。

本研究は、日・中の標準手話の研究を主眼としており、方言手話や聴覚障害に関わる手話研究はなされていない。しかし、本研究は、後者の関連分野の研究を進めていくための基礎研究として重要な知見を提供する。例えば、本研究の標準手話の研究で明らかにされた記号のメカニズムに基づき、標準手話と方言手話の文法性の違いの比較が可能となる。本研究では、聴覚障害の手話研究は主眼となっていない。しかし、本論文の標準手話の研究は、聴覚障害の手話研究のための基礎研究としても重要な知見を提供する。またこの種の研究は、災害時のコミュニケーション手段の研究において重要な役割をになう。これまでの災害時のコミュニケーションの研究は、健常者の日常言語に基づくコミュニケーションが主眼となっているが、手話による災害時の非・言語伝達の研究は等閑視されている。本論文の手話研究で得られた知見は、災害時における非・言語的な伝達手段の開発の研究に重要な知見を提供する。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	靳 衛衛
副査	教授	益岡隆志

最 終 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　名	唐 昭君
試 験 科 目	
判　定	合　格　・　不　合　格

要　旨
学位申請者の研究成果を確認し、審査するため、博士論文を中心に口述試験を実施した (2022 年 1 月 27 日)。 申請者は、本研究のための言語学の理論的枠組み (特に、認知言語学の理論的枠組み) を十分に体得し、言語現象の分析に適切に適用している。また、本研究に関連する国内、国外の重要な論文、研究書、等の文献を精読し、その知見を本研究に適切に反映している。申請者は上述の口述試験において、以上の学問的な知識と研究能力を背景に、論文内容に関する理論面、実証面の質問に対し明確にかつ的確に答えることができた。尚、本論文と研究成果の一部は、言語学と言語文化関係の学会誌、紀要、等に掲載され、高い評価を得ている。この点においても、本研究は、言語学と関連分野の研究における学問的水準に達している。申請者の外国語の試験については、日本語により執筆された学位論文と日本語、英語、中国語の要約における高い表現力と理解力から判断し試験を免除した。 以上の諸点を総合し慎重に判断した結果、審査委員会は、本博士論文に対し全員一致で 博士 (言語文化) の学位授与を適格と認め、合格と判断した。

審査委員

区分	職名	氏名
主査	教授	山梨正明
副査	教授	靳 衛衛
副査	教授	益岡隆志